

第52回日本アレルギー学会 総会特集



第52回日本アレルギー学会総会（会長：昭和大学第一内科・足立満氏）が2002年11月28日～30日、パシフィコ横浜（横浜市）で開催された。テーマは、アレルギー疾患の病因と治療—基礎研究の進歩とその臨床応用はどこまで進んだか—。病因解明に関する最新の知見や新しい治療法に関連する講演、シンポジウムを中心にプログラムが企画された。本特集ではその中から、話題のシンポジウムなどをいくつか紹介する。

目次

- シンポジウム
「感染とアレルギー疾患」 1
- 会長講演
「気管支喘息の病態と治療 21世紀の展望」..... 2
- シンポジウム
「化学物質過敏症」 3
- 特別企画シンポジウム
「アレルギー性疾患治療ガイドラインは治療現場にどのような変化をもたらしたか」 4

提供記事目次

- 座談会 「花粉症治療の最前線
—花粉症患者のQOLを考える—」 5~8

提供：大日本製薬株式会社/明治製薬株式会社

シンポジウム「感染とアレルギー疾患」

アレルギー発症、増悪への影響 解明進む寄生虫やウイルス感染の関与

気管支喘息をはじめ、各種アレルギー疾患の発症、増悪に、微生物の感染が影響を及ぼし得ることは、従来より経験的に知られていた。近年、基礎的、臨床的な研究が進み、どんな微生物の感染がどのようなメカニズムでアレルギー疾患の発症、増悪に関与するのかが徐々に明らかになってきた。シンポジウム「感染とアレルギー疾患」（司会＝岐阜大学小児科・近藤直実氏、昭和大学第一内科・國分二三男氏）では、寄生虫、ウイルスなどの感染がアレルギー性鼻炎や気管支喘息に及ぼす影響について、最新の研究成果が報告された。

寄生虫感染

「アレルギー疾患抑制説」を 否定する疫学調査結果

アレルギー疾患が増加しているのは寄生虫、特に蠕虫の感染が減ったためだとする考え方がマスコミなどを通じて話題となっている。しかし、寄生虫感染とアレルギー疾患の関係について、明確な結論は得られていない。

寄生虫感染によってアレルギー疾患が抑制されるという「抑制説」では、蠕虫感染によってアレルギー性特異的IgE抗体産生が抑制される、あるいは蠕虫などに対する特異的IgE抗体や総IgEが増加するために、ハウスダストなどに対する特異的IgE抗体が産生されても、肥満細胞上のIgEレセプターとの結合が阻害され、アレルギー疾患の発症が抑制されるといったメカニズムを想定している。

一方、寄生虫感染がアレルギー疾患を助長するとする「悪化説」も示されている。たとえば蠕虫に感染することにより、蠕虫に対する特異的IgE抗体のみならず、他のアレルゲンに対する特異的IgE抗体の産生も亢進するという考えに基づく仮説だ。

本シンポジウムでは、こうした寄生虫感染とアレルギー疾患との関連について、南米エクアドルでの疫学調査より検討した結果が、山梨医科大学耳鼻咽喉科の松崎全成氏から報告された。

松崎氏によると、エクアドルでは最近、都市部を中心にアレルギー性鼻炎が増加しており、耳鼻咽喉科開業医で最も高頻度の疾患となっている。一方、農村部では上水道が整備されておらず、寄生虫感染がいまなお多く認められる。

今回の調査では、都市部の中学生159人、農村部の中学生108人を対象に、アレルギー性鼻炎の有病率、検査所見

と寄生虫感染との関係を検討した。その結果、アレルギー性鼻炎の有病率は都市部25%、農村部12%、寄生虫保有率はそれぞれ44%、73%と、寄生虫感染がアレルギー性鼻炎を抑制するともとれる結果が得られた。

しかし、都市部で中学生全体を、蠕虫感染者、原虫感染者に分けて検討すると、アレルギー性鼻炎の有病率はいずれも25%前後で有意差がみられなかった。この成績から、松崎氏は「都市部における寄生虫感染の減少はアレルギー性鼻炎増加の原因ではないと推測された。都市部では大気汚染、食生活の変化など、寄生虫感染以外の因子の関与が大きいのではないか」と分析する。

これに対して農村部では、蠕虫感染者のアレルギー性鼻炎有病率は7%で、原虫感染者の23%に比べて有意に低かった。しかし、蠕虫の一種である蛔虫のRASTとハウスダストのRASTとの間には正の相関関係が認められた。このことから、蠕虫感染がハウスダスト特異的IgE抗体の産生を阻害するという考え方は否定されるとした。

また、血清総IgE値によってハウスダスト・スクラッチテストの陽性率に差は認められなかった。この結果は、蠕虫感染に伴う総IgE増加がアレルギー性特異的IgE抗体の肥満細胞結合を阻害するという考え方を否定する。

以上より、松崎氏は「アレルギー患者では蠕虫に対してもIgE抗体産生が亢進し、蠕虫が排除されやすい状態にあり、そのために蠕虫保有者が少ないと考えられる。つまり、蠕虫感染がアレルギーを抑制するのではなく、原因と結果が混同されていて、アレルギー患者で蠕虫が少なくなる結果として、蠕虫感染がアレルギー疾患を抑

制しているように見えてしまうと考えるほうが矛盾しない」と指摘。寄生虫感染の頻度はアレルギー疾患の有無やIgE産生能などの病態を反映した結果と考えるべきことを示唆した。

ウイルス感染

ウイルス量などにより 異なる気道炎症への影響

ウイルス感染とアレルギー疾患の関係においても、小児期の感染が喘息の発症を抑制する、あるいはウイルス感染が喘息のリスクファクターになるなど、相反する考え方が存在し、さらなる研究の進展が望まれている。しかし、気管支鏡を使って喘息患者の気道局所から検体を採取するのは容易ではない。また、ウイルスの培養は細菌よりも難しい。このような方法論的な問題が研究の進展を阻んでいる可能性も否定できない。

こうした中、長崎大学第2内科の松瀬厚人氏らは、Dermatophagoides farinae (Df) アレルゲン感作BALB/c喘息マウスモデル（以下、喘息マウス）に、喘息の発症や増悪に関連するともいわれているRespiratory syncytial virus（以下、RSウイルス）を感染させ、喘息の病態に及ぼす影響を検討した。

その結果、まず、RSウイルス10⁶pfuを1回だけ感染させた場合には、炎症性マーカーの上昇や著明な好酸球浸潤が認められ、急性増悪をきたすことがわかった。さらに、同量のRSウイルス感染を繰り返すと、Th2サイトカインの誘導に関与すると報告されているMIP-1（Macrophage Inflammatory Protein-1）が相乗的に増加。サイト